

Title	T S S 端末を用いた英語論文の清書
Author(s)	安岡, 則武
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1979, 33, p. 53-59
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/65413">https://hdl.handle.net/11094/65413</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## TSS 端末を用いた英語論文の清書

大阪大学蛋白質研究所 安岡 則 武

英文を書いたり、タイプをしたりすることに自信のある方は、この一文を読まないで下さい。

研究が一段落して一定の成果が得られれば論文を書くこととなります。他人様から見れば、“吹けば飛ぶような”研究であっても、本人にとっては愛着のあるものですし、大学で働いているからには論文が出ないことには働きつづけることができなくなります。雑文は日本語で間に合いますが、ちゃんとした論文は、ほとんど英語で書きます。いつも英語の表現力が乏しいことに悩まされますが、それに加えて、タイプがまた苦痛のたねです。一つまともな論文が印刷されるまでに、何度タイプすることになるでしょうか。メモ用紙に書きなぐった英文が、大体出来ると一度タイプをします。それを見返していると、書き加えたり、変更したりするところが出てきて、またタイプをやり直します。このあたりで、ボスに見て貰ったり、共同研究者と議論して手直しをします。これで大体の形は出来上がり、タイプします。このまま投稿できたら結構なことなのですが、英文には自信がないものですから、投稿の前に、英語が母国語である友人に添削してもらいます。送り返されて来た原稿を見ると、ごく初歩的な誤まりが、わんさとあって溜息が出ます。気を取り直して、清書のタイプをやり、投稿いたします。ところがこれで終りというわけにはいきません。すんなりと印刷されるのは、恥かしながらごく稀なことであり、たいていは、エディターやレフェリーのコメントに応じて、いくらかの修正を施すこととなります。どうでもいいようなことを、しつこく言うてくるレフェリーがあったりして、しゃくにさわりますが、そこはぐっとこらえて、ご無理ごもつとも、ひたすら低姿勢で修正いたします。ここでまたタイプが必要です。ときにはこの段階で二度位やらないといけないことがあります。

こうして数えてみると、私のような出来の悪い研究者にとっては、一つの論文が印刷されるまでに、5回位のタイプが必要です。ほとんど修正のない部分まで打ち直すことがあり、面倒だとよく思います。それに清書というのがくせもので、打ち直すたびに、新たなミスタイプが生まれるものです。消去機構付きのタイプライターなどが登場したのは福音ではありますが、それで間に合わないこともよくあります。

大型計算機でTSSを使うようになり、プログラムやデータの編集にエディター・サブシステム

を利用するようになりました。行の置きかえや挿入、単語あるいは綴りの単位での消去、置きかえ、挿入などが簡単なコマンドで実行できます。文の順序を変えたいときは、CUTというコマンドで取り除き、こうして集めたテキストを挿入したい場所へPASTEコマンドで入れれば出来あがりです。プログラムの作成や修正などは、これまでのカードによる入力から、ほとんどの仕事がTSS端末の前での作業に移って来ました。もちろんカードはそれなりの便利さもあり、捨てがたく、適当に使いわけすればよいわけですが。

エディターの便利さが分ってくるにつれ、これを英語論文の作成、清書に使いたいと痛切に思うようになりました。東京大学の大型計算機センターでは、石田晴久先生がこうしたシステムを開発して実用に供されております。<sup>1)</sup> 阪大センターのACOSには、エディターとランオフというシステムがあり、ちゃんと用意ができています。問題は端末機です。アルファベットの太文字・小文字がタイプでき、しかも印字品質が良好でなければなりません。石田先生は、市販のIBMタイプライターを改造し、マイクロコンピュータに接続し、これを端末機として使用しておられますが、これは簡単に真似のできるものではありません。IBMは、こうしたことのできるコンピュータに接続したタイプライターを市販していますが、安いものではありません。大型計算機に直接TSS端末として接続できる適当なものが必要です。NECはバドミントンプリンターというのを出しております。私どもの研究室では、最近このバドミントンプリンターが使えるようになりましたので、早速ためしてみました。印字品質も悪くなく、これならいけるという感じです。实例を見ていただくのがいちばん早いでしょう。図1にエディターを使って入力し、ランオフでプリントさせた例を示します。例文として、日本化学会の欧文誌投稿規則<sup>2)</sup>に掲げられているものを使わせていただきました。その原文を図2に掲げます。如何でしょうか。これなら使えると言ってよいのではないのでしょうか。不十分な点はもちろんあります。活字の上つき下つきがまず最大の欠点です。標題のAs<sub>4</sub>はAs<sub>4</sub>でなければなりません。本文最後の行の最後の単語halides<sup>1)</sup>はhalides<sup>1)</sup>であり、引用文献の番号を示すために肩つきになるもので、このままでは誤解を招いてしまいます。しかし、投稿の際には上つき下つきの校正記号を指示しておくように定められていますから、許されるのではないのでしょうか。もう一つはイタリック体やギリシャ文字です。最近のタイプライターは、活字ボールをとりかえて、いろんな文字が打てます。数式などもそれで作れます。しかし論文の原稿としては、通常のパイカで打っておいて、あとで記入するとか、ギリシャ文字には対応するローマ字をタイプしておいて、校正記号で記入してやるとか何とか間に合うものと思います。

ランオフサブシステムを用いてこのような様式でタイプさせるためには、テキストにコマンドをさしはさんでやらなければなりません。この文を出力させるのに使ったファイルの中身を図3に示します。ピリオドではじまる4文字のコマンドがそれです。・BEGIは、テキストのはじまりで、

改頁を指定します。つぎの .PAGE T, Cは、ページ番号を、ページの上端の中央の位置に印字させる指令です。図1の上端の1はこれで出力されたものです。あとのコマンドは、1ページの行数が66行、1行の字数が86字といった指定をするものです。各コマンドの機能や文法はNECのマニュアル<sup>3)</sup>を御覧下さい。面白いのは .CENTコマンドで、指定された行が丁度ページの中央にくるように印字されます。これをタイプライターでやろうとすると字数を数えなければならず、なかなか面倒なのですが、システムはコマンド1つでやってくれます。さらにお気づきのことと思いますが、1行の字数に合わせて、はみだしたら次の行へ移し、余れば次の行から持ってきて入れるということをやります。これを指示するのは .FILLコマンドです。右端が揃うのはJUSTコマンドの効果です。単語の間にブランクを適宜挿入して右端を揃えているわけです。投稿する論文の原稿としては、これはやりすぎかも知れません。やりたくないければ、このコマンドをはずせばよいだけです。

ランオフサブシステムでこの様式のもをプリントさせるときの会話はつぎのとおりです。ログオンののち。

SYSTEM ?

に対して RUNOFFと答えます。

ready

と打ってくるので

REFORM FILE 1,, PRINT

とタイプインします。FILE 1は、図3に示したテキストの入っているファイル名です。すると、

ready

と打ってくるので、復改を入力します。

position paper now

と出力されるので、折目のある用紙なら、折目を合わせた上で、復改を入力しますと、図1のような出力が得られるわけです。

先ほど書き忘れましたが .REFEコマンドは、カッコ内にある文章をそのページの脚注としてタイプしてくれます。これなど大変便利です。脚注をタイプするやり方は、もう一つあって .FOOTというコマンドです。

如何でしょうか。私も使いはじめたばかりで、機能を知りつくしているわけではありません。もっと便利なコマンドもあるようです。使っているうちに、さらにうまいやり方が見つけられそうな気がいたします。

システムは結構よく出来ていますが、端末機の方に多少問題がありそうです。印字された文字が、

リボンに隠されて見えないことが欠点として指摘ができます。そのためシステムからの入力促進のメッセージが見えず、見当でタイプすることになります。これはぜひ改善してほしいと思います。リボンがカーボンの打ち抜きであれば印字がもっと美しくなるでしょう。これも考えていただきたい点です。

この一文が、英文タイプが下手で論文を作るのに悩んでおられる方々のご参考になれば幸いです。

- 1) センターニュース、東京大学大型計算機センター、Vol. 10, No. 7, 8, P. 38-41  
1978.
- 2) 日本化学会欧文誌投稿規則投稿の手引 P. 63 日本化学会、昭和52年3月
- 3) ACOS-6, タイムシェアリング、テキストディタ/ランオフ説明書、FEF 07-3,  
日本電気

(General and Physical)

Molecular Structure of As<sub>4</sub>

Molecular Structure Determination by Gas Electron  
Diffraction at High Temperatures. I. Arsenic

Yonezo MORINO, Takeshi UKAJI,\* and Tetsuzo ITO\*\*

Department of Chemistry, Faculty of Science, The University  
of Tokyo, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113

\*Department of Chemistry, Ibaraki University, Bunkyo-cho,  
Mito 310

(Received , 197 )

A high-temperature nozzle assembly for gas electron diffraction has been designed and constructed. The molecular structure of ..... The observed amplitude has led to the evaluation of the bond-stretching force constant,  $f_r(\text{As-As}) = \dots\dots\dots$

---

Recent technical and theoretical developements in the method of gas electron diffraction have made it possible to determine interatomic distance and.....  
.....However, almost all such high-precision data have been obtained at room temperature;.....

About thirty years ago, Maxwell and his co-workers investigated the molecular structure of alkali halides<sup>1)</sup>

---

\*\*Present address: The Institute of Physical and Chemical Research, Komagome, Bunkyo-ku, Tokyo 113.

付録 8A タイプ印書見本 (表題, Synopsis, 本文)

(1)

(General and Physical)

[Molecular Structure of  $As_4$ ]

Molecular Structure Determination by Gas Electron  
Diffraction at High Temperatures. I. Arsenic

Yonezo MORINO, Takeshi UKAJI\*, and Tetsuzo ITO\*\*

Department of Chemistry, Faculty of Science, The University  
of Tokyo, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113

\*Department of Chemistry, Ibaraki University, Bunkyo-cho,  
Mito 310

(Received , 197 )

A high-temperature nozzle assembly for gas electron diffraction has been designed and constructed. The molecular structure of ..... The observed amplitude has led to the evaluation of the bond-stretching force constant,  $f_r(\text{As}\ominus\text{As}) = \dots\dots\dots$

Recent technical and theoretical developments in the method of gas electron diffraction have made it possible to determine interatomic distances and..... However, almost all such high-precision data have been obtained at room temperature;.....

About thirty years ago, Maxwell and his co-workers investigated the molecular structure of alkali halides <sup>1)</sup>

\*\*Present address: The Institute of Physical and Chemical Research, Komagome, Bunkyo-ku, Tokyo 113.

SYSTEM ? LIST NYBULL

.BEGI  
.PAGE T,C  
.PAPE 66  
.LINE 86  
.DOUB  
.TOPM 5  
.BOTT 5  
.FILL  
.JUST  
.PARA 20  
(General and Physical)  
.PARA 20,10  
Molecular Structure of As<sub>4</sub>  
.SPAC 2  
.CENT 2  
Molecular Structure Determination by Gas Electron  
Diffraction at High Temperatures. I. Arsenic  
.SPAC 2  
.CENT  
Yonezo MORINO, Takeshi UKAJI,\* and Tetsuzo ITO\*\*  
.REFE (\*\*Present address: The Institute of Physical and  
Chemical Research, Komagome, Bunkyo-ku, Tokyo 113.)  
Department of Chemistry,  
Faculty of Science, The University  
.PARA 20,5  
of Tokyo, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113  
.PARA 20,0  
\*Department of Chemistry, Ibaraki University, Bunkyo-cho,  
.PARA 20,5  
Mito 310  
.CENT 1  
(Received , 197 )  
.SPAC 2  
.PARA 20,5  
A high-temperature nozzle assembly for gas electron  
diffraction has been designed and constructed. The molecular  
structure of ..... The observed  
amplitude has led to the evaluation of the bond-stretching  
force constant,  $f_r(\text{As-As}) = \dots\dots\dots$   
.CENT

---

.PARA 20,5  
Recent technical and theoretical developements in the  
method of gas electron diffraction have made it possible to  
determine interatomic distance and.....  
.....However, almost all such high-  
precision data have been obtained at room temperature;.....  
.PARA 20,5  
About thirty years ago, Maxwell and his co-workers  
investigated the molecular structure of alkali halides1)

SYSTEM ?RUNO  
ready  
REFORM NYBULL,,PRINT  
ready

position paper now